

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 65 号

平成 19 年 9 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

金田福一「日々の糧 365 日」より（4）

8 月 6 日

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。（エペソ 5・8）

あなたがたは被害者でいてはいけません。イエスさまは、被害者であったあなたを、御手の中に救い入れて下さいます。イエスさまはあなたを、変えて下さいます。私ほど不幸なものはないと、あなたは思っていました。なぜ私ばかりが、損をしなければならないのかと、考えていました。いつまでこの苦しみが続くのかと、嘆いてばかりいました。イエスさまはあなたの、その苦しみを、怒りを、恨みを、悲しみを、被害意識を、ご自分のものにして下さいます。そして、愛を、やさしさを、温かさを、いたわりを、あなたの心に入れて下さいます。ひそかにみ胸にすがり、「イエスさま」と、御名を呼びなさい。

8月7日

また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をすることを志し、
自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい。

(テサロニケ 4・11)

主に従うものは、世にあって健全な生活を営むべきです。今日は、生活よりも思想が重視される時代ですが、キリストへの服従とあかしの場は、思想にあるのではなく、生活にあるのです。若い人は、人に迷惑をかけず、隣人と公共に仕えなさい。婦人はおしゃべりをつつしみなさい。口にしてはならないことを口にしないためには、おしゃべりをつつしむよりほかにありません。また夫(妻)と家庭を大切にしなさい。夫(妻)や家庭よりも、教会を大切にすることは、自己満足かも分りません。また、勤勉に働きなさい。社会の生産にたずさわるとは、社会人としてのつとめです。神のみ言は社会生活と労働の中で聞くべきです。

8月10日

あふれるばかり感謝しなさい。(コロサイ 2・7)

すべての事について、感謝しなさい。(テサロニケ 5・18)

主はあなたを変えて下さいます。主に変えられる時、あなたは、何でも感謝できるようになります。何でも感謝するあなたの生き方が、誤解されても感謝です。バカにされても感謝です。非難されても感謝です。腹を立てる必要はありません。年中病気をしていることも感謝です。病気の日々にこそ、主の慰めと愛は実感されるからです。医者も感謝です。主に用いられておられるからです。家庭も感謝です。いよいよあなたを主に結びつけてくれるからです。感謝する人に変えられるならば、過去の暗い日々も今は感謝です。「ありがたいなあ」と、感謝にあふれてこそ、あなたはキリストの証人であるのです。

8月12日

「いっしょにお泊りください。そろそろ夕刻になりますし、日も
おおかた傾きましたから。」(ルカ 24・29)

信仰は、頭のことではありません。体験のことです。あなたの生活において、イエスさまとお話ししなさい。私たちを見守っていて下さるイエスさまと、生活の現場で、お話しをしなければだめです。年を取ってくれば、苦しさも増すでしょう。淋しさも深まるでしょう。いろいろのものが、失われていくでしょう。そして、死が近づいてきます。そのようなあなたを、見守っておられるイエスさまの眼は、愛と、いたわりに満ちていることを信じなさい。そのような日々こそ、イエスさまと深く交わり、「主よ、感謝します」と、お話しすることができるのです。あなたの眼と、指先を、イエスさまに向けなさい。

8月15日

謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び
合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

(エペソ 4・2-3)

冷静なお祈りをする牧師の所には、冷静なお祈りをする信徒が集められます。熱烈なお祈りをする伝道者のところには、熱烈なお祈りをする信徒が集められます。自分たちのほうが正しいと思うとしたら、愚かなことです。それぞれに用いられており、それぞれに欠けた所があるのです。他の人のお祈りや、集会のあり方を、絶対に批判すべきではありません。自分の欠けた所について、いつも低い心を持ち、他の人に学ぶべきです。自分の信じた所をやり抜いていく確信が必要で、いたずらに卑屈な姿勢を持つべきではありませんが、また、おのれに対する反省と、他を容れる寛容さをも、身につけていくべきです。

8月19日

主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく学び、反対する者を柔和な心で教え導くべきです。（テモテ 2・24 - 25）

真宗門徒の言行録である「妙好人伝」には、「罪深き身なれど」という言葉と、「決して人と争わず」という言葉とが、たくさん用いられています。浄土真宗の一面における特徴は、平等思想と、権力への抵抗であったと言われますが、「権力者も卑賤の者も、共に罪深きことにおいて平等」と彼らは自覚したのであって、傲慢な姿勢や敵意をもって、世の矛盾を指摘したわけではありません。むしろ、矛盾はおのれみずからの内に深く抱きつつ、「決して人と争わない」謙虚な闘争の否定が、権力の欺瞞の前に、決して屈しなかったのです。初代のキリスト教会においても、柔和な人たちほど、殉教し得たことを、深く思うべきです。

8月21日

私はキリスト共に十字架につけられました。もはや私が生きてい
るのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

（ガラテヤ 2・20）

感動したり、興奮することが、新生の体験と勘違いされることがありますが、ほんとうの新生の体験は、キリストの十字架の贖いを、自分のこととして信じることのできた、その「時」に起こるのです。それは、人間のわざではありません。キリスト御自身のみわざなのです。十字架の贖いによって起こされたのでない新生は、消えてしまふことがあります。ほんとうの新生は、生涯に影響を与えます。それは、その日は、生けるキリストとの交わりが始まった日であり、真のキリスト者の誕生の日であるからです。また、キリスト者は、常にそこに立ち、常にそこに立ち返る場所であるからです。

8月24日

私の宣べ伝えたこの福音の言葉をしっかり保っていれば、この福音によって救われるのです。(コリント 15・2)

自分が救われて、しあわせであるだけでなく、私たちには、この福音を次の世代に、誤りなく継承させる責任と、使命とが与えられています。どんなに大きな会堂も、崩れ去る日が来るかも分りません。何万という会衆も、散り散りになるときが来るかも分りません。今どんなに盛んであるかということよりも、今ほんとうにみ言が語られ、キリストの福音が宣べ伝えられ、それが次の世代に向かって、継承されているかどうかということが問題なのです。たとえどんなにその時代の言葉や要請があったとしても、真に継承さるべきは福音は、人間の罪と、キリストの十字架と、復活とより他にありません。

8月27日

それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中であって傷のない神の子供となるためである。(ピリピ 2・15)

「聖名(みな)のため受けし傷あと持たずして聖前(みまえ)に出ずる恥知るや君」と歌った人があります(小出義彦)。私は傷だらけの人間です。しかし、残念ながら、キリストのため、十字架を負うた傷ではありません。みずからの罪のための、顔も上げられぬほど恥ずかしい傷です。主の愛と慰めに、いやされてきましたが、今も、血にまみれた自分のみにくい姿を夢に見て、うなされることがしばしばです。十字架の血のしたたり落ちた、その所にひれ伏して、小さくなって、赦されているだけです。しかし、主の来たりたもう日には、清く傷なき者として、み前に立たせていただける御約束を思って、喜んでいるのです。

8月28日

あなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われる。(ローマ10・9)

「イエスは主である」という告白を、キリスト者の努力や、行動や、緊張として、理解している人がありますが、それは誤りです。それは、自己義認と、功績主義にすぎません。決して福音ではありません。どうして、そのような誤りが生じるのでしょうか。罪認識と、キリスト体験がないからです。「イエスは主である」ということは、主義や思想ではなく、おのれを罪人として自覚させられた者が、十字架のキリストと、その愛に打たれた、衝撃の告白なのです。それはむしろ、努力や、行動や、緊張からの解放なのです。その告白が、世にあって生ぜしめるものは、隣人への愛と、福音の証言に過ぎないのです。

8月30日

わたしのしもベカレブは、ほかの者と違った心を持っていて、わたしに従い通したので、わたしは彼が行って来た地に彼を導き入れる。(民数14・24)

キリストのお入りになれない家庭があります。キリストは第1のお方ではないのです。むしろじゃまです。幸福のための何かの足しに、時々、お目にかかりに行き、お言葉を聞きます。それが、ある人々にとっての礼拝です。「事業と信仰とは別」と、割り切っている人もあるでしょう。事業の中まで、信仰を持ちこむ気にはなりません。その人たちにとっての礼拝は、気分転換にすぎません。キリストが求めておられる人は、そんな人々ではありません。家庭を主に従わせる人、事業を主に従わせる人を、求めておられるのです。「わたしについてきなさい」と、主は言われます。信仰とは、服従なのです。

8月31日

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。(コリント3・16)

私は「いやしの賜物」を否定いたしません。しかし、いやしは福音の根本ではありません。いやしを第1の売物にすると、福音が稀薄になります。福音を受け入れるところに、いやしの奇跡の起こることもあります。より大きな奇跡は、なおらない病気においても現わされる、キリストの栄光です。自分が病気ばかりしている伝道者は、いやしを強調しないでしょ。キリストと一体となっている信仰者でも、病気ばかりしている人がいます。彼らは、その病気の中で、感謝と賛美に明け暮れることによって、キリストの栄光を現わしているのです。魂の救いよりもいやしを求める人々の、その自我に媚びてはいけません。

9月1日

イエスは、彼に言われた。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」(ルカ19・9)

不満を日々の糧にして、生きることも出来ます。滅びへの歩みです。恵みを感謝しながら、生きることもできます。祝福された人生です。同じ現実の条件に生きながら、ある人は不満に生き、ある人は感謝に生きます。無理に不満を忘れ、無理に感謝しようとしてもだめです。人間そのものが変えられ、物を見る眼が変らねばだめです。キリストが来られました。現実の条件を変えて下さるためにはありません。人間を変えるためにです。キリストを発見し、キリストと共に生きる時、人間が変えられ、物を見る眼が変えられ、不満は忘れ、感謝と喜びに生きられるようになるのです。それが、キリストの救いです。

9月3日

わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。

(黙示録 2・2)

キリスト者が、立ち上がって弁明をしなければならない時は、キリストの十字架と復活について、証言しなければならない時だけです。その時には、臆してはいけません。しかし、語るべき言葉を与えると、主は約束されました(ルカ 21・15)。自分の利害や、自尊心のためなら、どんなに心が引き裂かれようと、弁明は見苦しいわざです。正義のためとか、キリストのためとか言って心をいらだてても、実は、自分のメンツのためではないのか、深く反省すべきです。誤解され、悪者にされ、心が打ち砕かれる時こそ、主は共に居て下さり、知っていて下さり、天を仰がせて下さるのです。

9月4日

このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。(コロサイ 1・29)

「労苦しながら奮闘しています」とパウロは言いましたが、「自分のうちに力強く働くキリストの力によって」という前半の言葉を、見落としてはいけません。努力や修練というような言葉は、注意して用いないと、福音を希薄にすることがあります。キリストが何をして下さるかということが強調されないで、人間が何をしなければならないかが説かれると、もはや福音ではなくなります。それだけではなく、人間の努力の説かれる所では、いつでも、人間に栄光を帰する傲慢が、忍びこんでいるのです。私たちが救われたことも、健全な生活をさせていただいていることも、ことごとく、主の恵みにすぎないのです。

9月6日

「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩くことがなく、いのちの光を持つのです。」（ヨハネ8・12）

主の恵みにこたえて、大胆に、主に服従すべきです。それはある意味においてずうずうしいことです。あつかましいことです。自分の罪や、家族の不信仰によって、信仰の足どめをされ、礼拝を休んだり、心を曇らせたりすることは、主のみ旨ではありません。自分にガッカリしようが、家族がとんでもないことをしようが、あるいは、教会に何が起ころうが、あつかましく、ずうずうしく、礼拝を守り、信仰の日課を実践すべきです。それが信仰であり、服従であると思います。もし誰かに非難されても、開き直らないで、頭を垂れるべきです。赦して下さる主にお従いしないで、どうして生きていけますか。

9月8日

苦しみにあったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇119・71）

信仰を持っていても、苦しみの耐えないこともあります。キリスト教に好意を持たない人々の、呪いと軽蔑の目で見つめられながら、耐えているキリスト者もあります。次々に訪れてくるふしあわせや、苦しみの日々に、もしも、キリスト者が、感謝とほほえみを失うならば、サタンを喜ばせるだけです。キリスト者であるが故の、苦しみであったとしても、喜んでそれをお受けしていくことができるのです。苦しみに会わないための信仰ではありません。どんな苦しみの日々にも、キリストのいのちの力を注がれて、感謝とほほえみを失わないために、あなたは選ばれ、生かされているのです。あなたの身をもって、神の栄光をあらわしなさい。

9月10日

あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。（ペテロ2・10）

苦しみに、一人で耐えるのではありません。主が共に居て下さることを、感謝しつつ耐えるのです。今、主と共にあることに心満ち足りて、あすのことを空想いたしません。おのれの常識が、明日の暗さを告げる今日も、主は微笑を与えて下さいます。主が共に居て下さるのに、何を思い案ずる必要がありません。主の背に隠れて、現実から眼をそらすのでもありません。主のかたわらにある者は、津々たる興味をもって、現実の一つ一つの出来事を見守るのです。特に、おのれに不利益な出来事の訪れを、笑みを浮かべて出迎えることこそ、キリストのやからのふしぎさであると言わなければなりません。

9月13日

イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば賜物として聖霊を受けるでしょう。（使徒2・38）

救われないのを人のせいにははいけません。神様とあなたとの問題なのです。今までの罪を、自分で捨てようとしているのではありませんか。罪があるままでいいのです。「主よ、私をお救い下さい」と言いなさい。身支度をする事よりも、お受けすることのほうが大切です。聖書を読む習慣も、お祈りをする事、洗礼を受ける事、教会のグループの中に入る事、すべては「お受けする」ことの表現です。信仰生活は、何かを「する」ことにあるのではなく、「お受けする」ことにあるのです。天の喜び、天の平安、天のいのちを、お受けしなさい。あなたが救われるために！